

# 津軽弘前藩の武芸(3)

— 資料紹介 —

太田 尚 充

## 『古往万徳集』(2) 弘前市立弘前図書館蔵

解題 補足(1)

『古往万徳集』が武芸専門書ではなく、弘前第四代藩主・津軽信政（正保三年＝一六四六～一七一〇＝宝永七年）に関する多くの言行録の中の一冊であることは前回（本紀要第二十一号）で述べた。右に云う多くの言行録とは例を挙げれば次の書である。

- (1) GK | 289 | 3 『高照霊社御意書』
- (2) GK | 289 | 4 『明君夜話近士口傳集』
- (3) GK | 289 | 5 『信政公御意之筋聞傳集』
- (4) GK | 289 | 6 『信政公御意之筋聞傳集』
- (5) GK | 289 | 7 『高照霊社御意書』

- |      |    |     |     |           |
|------|----|-----|-----|-----------|
| (6)  | GK | 289 | 8   | 『高照霊社玉話記』 |
| (7)  | K  | 289 | 404 | 『信政公御意書』  |
| (8)  | GK | 289 | 2   | 『高照宮御遺鑑』  |
| (9)  | K  | 289 | 47  | 『高照宮御遺鑑』  |
| (10) | 甲  | 11  | 310 | 『高照宮御遺鑑』  |
| (11) | GK | 289 | 12  | 『貞享規範録』   |
| (12) | K  | 289 | 48  | 『貞享規範録』   |
| (13) | K  | 289 | 49  | 『貞享規範録』   |

注、右はすべて弘前市立弘前図書館の所蔵。GK・K・甲・289及び算用数字は所蔵記号・所蔵番号である。

右の中(8)・(9)・(10)は、享保一八年(一七三三)渡辺后利容の著作で『古往万徳集』より早い成立と思われる。採録が豊富で分量も多い。また、(11)・(12)・(13)は、文化三年(一八〇六)森内繁高の著作で『古往万徳集』より遅い成立である。以上の(8)～(13)については次回にゆずり、今回は(1)～(7)すなわち『高照霊社御意書』と『古往万徳集』との関わりを述べ、解題の補足としたい。

(1)～(6)については、すでに『昭和三十六年三月、弘前市立弘前図書館編「弘前図書館郷土資料目録・第二巻・岩見文庫郷土資料目録・その一」』(以下『目録』と略称する)が書名を挙げ、それぞれ苦干の「注」を添えている。これらの「注」を総括的にみると、(1)～(6)の各書は、異なる書名もあるが同一原本からの筆写であり、内容もほとんど同じであ

ること、当然のことながら原著者は同一人物であることが推察される。(7)についても同様である。以下各書をひも解き、簡単な解説を試みる。

(1) GK-289-3 『高照霊社御意書』<sup>注1)</sup>

筆写本

前記『目録』の「注」には「津軽信政の言行録、享保二年（一七一七）の著、著者伊東祐明通称衛門八、近習小姓、後の勘定奉行」とある。



写(1)G K-289-3 『高照霊社御意書』  
(弘前市立弘前図書館蔵)の序文書き出しの部分。

記述の形式は、序文と本文の二本立てで、序文<sup>写(1)</sup>にはこの書を記す目的、その末尾に「干時享保丁酉歳弥生日」（享保二年＝一七一七＝三月）と期日を記載している。本文は四九ヶ条の箇条書きである。たゞし一五番目の箇条がかなりの長文で、他の書ではこの箇条を二ヶ条に分けて記述しているところから、原本は五〇ヶ条であったのではないかと推察される。

著者名は記載していない。しかし、本書の第四

五条と『古往万徳集』中巻第一四条及び『奥富士物語』巻一の関係部分を検討すれば、著者の氏名はおのずと推察できよう。左にこの箇条の関係部分を挙げておく。

## GK—289—3 『高照靈社御意書』第四五条

一、或年江戸御発駕前日御座候間、廻り御道具等例之通御土蔵江取賦、御掃除七ツ過ニ相済たり。其時、西ノ御物置にて御意被遊候へ、今日ハ随分何れも能仕舞たり。座敷も廣く成たり。我も隙明たり。然ハちと劔術を可遣と被仰、田浦氏桜庭氏某<sup>(それが)</sup>三人被仰付。随分遠慮なしに仕候得との御意也。(以下略)

## GK—289—9 『古往万徳集』中巻第一四条

一、或時江戸御発駕前日、御座の間廻り御道具等例之通御土蔵江取賦り、御掃除七ツ時仕廻たり。其時、何れにも随分出精太義也。座敷も廣く成たり。我も隙なればちと劔術を仕ふへしと被仰、田浦四郎左衛門、伊藤衛門八、桜庭浜之丞三人被仰付。伊藤、桜庭御相手に成、随分無遠慮仕へ候へとの御意とかや。(以下略)

## 『奥富士物語』卷二

一、或人云、御意書に御発駕前晚、西ノ御物置にて、御劔術相手に罷出候者、田浦四郎右衛門、伊藤衛門八、桜庭浜之丞也。

浜之丞は御普代之兵衛門子にして御兒小姓に被召使御近習小姓后半兵衛正盈と申、御馬廻組頭迄相勤、世に名を被賞人品也。津輕一統志撰者也。当時兵助正慶<sup>大組武頭世 禄四百石</sup>祖父也。右一統志全部十四卷享保十六亥年五月撰。

四郎右衛門は、寛永十七辰年九月五日公儀より御預人相良清兵衛<sup>后摘髮ト云 本来ト云</sup>家来田浦主水子也。後に御側に被召仕御近習小姓、此人敏達博職にて、其頃野元道元に合躰被命緋坐扨取立たと云。当時田浦四郎右衛門<sup>御小姓組 禄百五十石</sup>祖父也。

衛門八祐明は、下ノ野<sup>(州)</sup>脇<sup>(注3)</sup>辺か前田沢の領主兵部某子孫伊藤六郎右衛門舎弟、則御中小姓に被召出御近習小姓、后勘定奉行相勤、且御意書の作者也。当時主税祐從<sup>御留守居</sup>祖父也。右御意書、世に尊德録共云。是渠<sup>(彼)</sup>か家訓と云々。<sup>十人扶持</sup>

すなわち右の各書から推して著者は伊藤衛門八祐明ということができよう。

(2) GK-289-4 『明君夜話近士口傳集』 筆写本

虫喰いの部分が多く判読困難な書であるが、内容は前掲書とほぼ同じである。五〇ヶ条より成り、特徴は次の記述を加えていることである。

此書の題号 信政公御意筋 此書の題号御名を以て題号とせん

信政公御意筋と有御名を以て題号とせん事多ければ明君夜話 と題するもの也

信政公御意筋と有御名

また、この書を最初に筆写した期日・人物として「寛政丁巳季冬（寛政九年Ⅱ一七九七）中野口撰」との記載があり、これをさらに筆写した本書については「明治十九年（一八八六）斎藤家」との記載がある。

(3) GK-289-5 『信政公御意之筋聞傳集』 筆写本



写(2)GK-289-6『信政公御意之筋聞書集』(弘前市立弘前図書館蔵)の書体。本文の終りの部分と、「干時寶永六己丑年正月廿一日」の書き出しの部分。

右の書名は前記の『目録』に従ったが、これはいわば内題であって、表紙の題名、いわゆる外題としては『尊聴録全』と記している。

五〇ケ条から成り、内容は(1)とほぼ同じである。筆写の期日は記載していないが、末尾に「横嶋安恒主」と、かつての所有者の記載がある。

#### (4) GK-6『信政公御意之筋聞書集』

筆写本

右の書名も前記の『目録』に従ったが、これも実は内題なのであって、表紙の題名は『高岡公明訓録・完』である。

信政の言行録の筆写本中最も丁寧な写本で、書家の手によるものと思われる。

五〇ケ条から成り、内容は(1)とほぼ同じであるが、

写(2)

「宝永六己丑年正月廿一日」と「宝永七庚寅六月」の二編を加えているのが特徴である。信政は宝永七年(一七一〇)一〇月一八日六五歳で亡くなってい

るので、その直前の言行に関する記述ということになる。おそらく原本に書き加えたものであろう。

筆写の期日と人物については「嘉永五年壬子（一八五二）二月謹写之 山本有龍」との記載がある。

(5) GK 1289-7 『高照靈社御意書』 筆写本

書名は(1)と同じで、同一原本からの筆写と思われるが、巻頭と巻末が切れている。すなわち(1)の第一条の終りから第四十三条の中段までが載っている。そのため末尾に「御意書前後本紙大破ニ而云云」との「断り書き」がある。

筆写の期日と人物については「文久三年癸亥（一八六三）十一月口謹而写之 佐藤範口」との記載がある。

(6) GK 1289-8 『高照靈社玉話記』 筆写本

書名は異なるが(1)と同一原本からの筆写と思われる。ただし、序文を巻末に書いたり、誤字も多い。これらは数回に及ぶ筆写の結果誤謬が重なり、このようになったのではないかと推察される。

この書には「御自筆之写」として次の期日の記述がある。期日のみ挙げておく。

宝暦七丑年（一七五七）正月十六日

安永二年（一七七三）三月十一日

安永九子年（一七八〇）六月廿日

天明三年（一七八三）十月

天明四年（一七八四）三月

右は何れも「弘前第七代藩主・津軽信寧」の時代で、「信政」より後代の「御自筆之写」と云わねばならないだろ

う。筆写の期日と人物の記載はない。

(7) K-289-4 『信政公御意書』 筆写本

この書名は表紙にある題名であるが、内題として『信政公御意之筋聞傳書』と記している。(1)と同一原本からの筆写と思われるが、簡条書きの形式をとっていない。しかし(1)～(6)の各簡条の書き出しの部分が、この書では「行」を改めて書き始めている。丁寧な写本とは云い難く、(1)の第二四・二五・二六・二七条に相当する簡条が欠落している。筆写の期日は記載がなく、筆写の人物について記載はあるが判読し難い。

以上(1)～(7)までの各書の記述形式について解説を簡単に試みたが、次に『高照霊社御意書』と『古往万徳集』との関わりについて述べようと思う。

もともと『古往万徳集』が成立した経緯を考察すると、概ね二つ考えられる。ひとつは、信政の言行に関して古老からの聞き書きによる成立、もうひとつは信政の言行に関して書かれた古書を参考としての成立である。

前者の、古老からの聞き書きであったのではないかという件については前回すでに述べた。すなわち基本的には著者桜庭兵助正慶の祖父や父からの聞き書きによる成立ではないかという推察である。祖父半兵衛正盈は、信政の「御児小姓」から「御近習小姓」へ、さらに「御馬廻組頭」というように、常に信政の側近にあってその言行に直接触れる立場にあったし、『津軽一統誌』の校正を務めた博識の士でもあった。父兵衛門武正も、五代藩主・津軽信寿の「御小姓組」であったから、家系の上から推察すれば、著者兵助正慶が生前の信政に接する機会がなかったにしても、信政の言行に関しての聞き伝えや資料に不足はなかったものと思われる。





写(3) G K-289-3 『高照霊社御意書』(弘前市立弘前図書館蔵)の書体。「居合のこと、相撲のこと、和柔のこと」を写真のようにそれぞれ分けて箇条書きにしているが、G K-289-9 『古往万徳集』ではこれをまとめて1ヶ条にしている。63頁参照。

もうひとつの、信政の言行に関する古書を参考として成立したのではないかという件について考察すると、こゝに『高照霊社御意書』(以下『御意書』と略称する)が登場することになる。

『御意書』は、享保二年(一七一七)伊藤衛門八による信政の言行に関する聞き書きであるが、『古往万徳集』より数年前にすでに成立していた書である。いわゆる古書という程ではなかったとしても、大いに参考にしたことは疑う余地はない。すなわち『御意書』五〇ヶ条の中から、実に四ヶ条が『古往万徳集』に引用されているという事実がある。もっとも引用の仕方、いわゆる丸写しではなく、例えば『御意書』の一ヶ条が『古往万徳集』では二ヶ条に分けられたり、さらに敷衍した記述が多い。また、ときにおいては逆に『御意書』の数ヶ条が『古往万徳集』では一ヶ条にまとめられている場合

もある。<sup>写(3)</sup>しかし総体的にみると、引用の各ケ条は『御意書』よりも幾らか詳しい記述となっている。このことは、

『古往万徳集』は『御意書』をベースとして書かれたという印象を強く与える。GK 289-9 『古往万徳集』は「巻上五一條条」「巻之中二八ケ条」「下之巻二二ケ条」「(補遺)三ケ条」の合計一〇四ケ条より成っているが、この中の三分の一以上の簡条が『御意書』からの引用、または関連事項の記述である。

このような『御意書』と『古往万徳集』との関わり合いの事実は、『古往万徳集』の著者桜庭兵助正慶が、『御意書』の著者伊藤衛門八祐明に対して、かつて祖父桜庭半兵衛正盈と「御近習小姓」の同役として、また直接信政に近侍した人物として深く信頼し、その著『御意書』に対しても、内容吟味の上、高く評価していたことを物語るものであろう。

本稿の『古往万徳集』(2)の解説執筆に当り、『御意書』との関わりから『古往万徳集』の成立に関する経緯の一端を述べ、解題の補足とする次第である。

注(1) 高照霊社の呼称について。津軽信政の神号。信政は四〇歳を過ぎてから吉川惟足(初代・従時)二代惟足(従長)に師事して吉川神道を学び、元禄八年(一六九五)五〇歳で二代惟足より高照霊社という神号を受けていた。

(2) 伊藤衛門八祐明について。

○『青森県人名大事典』(東奥日報社、昭四四)では次のように記している。

伊藤祐明。生年不詳、津軽藩士、通称衛門八、初め孫八、伊藤二代。

元禄一五年(一七〇二)近習小姓

宝永四年(一七〇七)馬廻三番組

享保三年(一七一八)鯨ヶ沢奉行から勘定奉行となった。

享保九年(一二二四)新知百石

享保一五年(一七三〇)物頭格

享保一八年(一七三三)没

「御意書(または尊徳録)」を書き残した。(津軽史106、奥富士物語)

○右の「元禄一五年近習小姓」についての補足。

『津軽史・第八巻』(みちのく叢著、青森県文化財保護協会、昭五三、九七頁)に「信政公御代・元禄八乙亥年十一月

廿一日改候弘前御家中分限帳寛」があり、「御近習小姓」一三人の氏名が載っているが、その中に「百五十俵伊東衛門八」「三百石桜庭浜之丞」とある。すなわち、伊東衛門八祐明は元禄八年にはすでに「御近習小姓」であったことを示している。「元禄十五年」には疑問がある。

○伊藤衛門八が「御近習小姓」になった経緯について。

『奥富士物語・巻五』（「新編青森県叢著・六」歴史図書社、昭四八、五一―五二頁）に詳しい。

一、公（津軽信政）之御代初の頃かとよ、前田沢兵部といひし人の室家、其頃年おひ後家にて在しを被召出、御広敷総司御年寄に御頼有しと也。此女中数年堂上労働られしかば、内義北室の式を能覚へ、且和歌連句の道にも立さわり、女工み之業は言に不及、心様優に艶かたにして、然も僻まさるるかゆへに、一入御意にも叶ひ、其頃若女中に万事導き、諸法支配して被勤しと云。伊藤祖母と被召しとかや。御給分は金老枚に御四季施御扶持等。

此人生所は上方にて、幼き頃より広助の大納言卿の御台所被召仕しとかや。且星眉（置眉とも）を用たる謂は、七歳之時八首の和歌を読み奉りしかば、卿甚御感在て絹の御衣一重并生涯星黛被免しと也。御広敷も暫年数相勤、八十六歳にして病死之由。且右八首の歌の下書は如何しけん。黒石弥右衛門か家に伝へて有由。伊東八右衛門祐則か妻伝咄也。

亦彼女中歳暮着にや、其時昼四ツ時より夜中迄、小袖十三裁縫綿迄入仕舞、休息之処明の烏にて有之とや。前田沢兵部は奥州安積郡前田沢に居住、二万石領ス。后佐竹旗本にて常州にて二万石給ふ。慶長之頃佐竹殿羽州秋田に所替以後秋田立退、仙台陸奥様にて二万石給り、鉄炮衆百人預り、其后浪人に成、甲州にて寛永十五年三月死。

嫡子伊藤六右衛門祐秀と言、於秋田伯父須田美濃家督之養子に成候得共、実父兵部秋田立退候已後、高源院様（弘前二代藩主・津軽信枚）に被召出禄四百石被下、御馬廻相勤、且兵部戦功之義高源院江委細に申上、尚又相伝之旗印等家伝候由、将又祐秀男子無之、足立源左衛門弟賀養子す。家督之処無調法有て家断絶と云。且祐秀養子後実子出生、伊藤六郎左衛門祐桂と云、桂光院様（弘前三代藩主・津軽信義）御兄小姓に被召出、承応三年（一六五四）御中小姓被召抱、金武枚御賄扶持扶四人分被下、御近習相勤、天和二年（一六八二）に御手廻被仰付、其子孫八相祐當時御膳番祐光、祖父伝に云、或時伊藤祖母之御意に何可望有やと仰に付、乍恐二男三男如何共被召遣被下置度旨申上候処、后兩人共に御中小姓に被召出、二男衛門八祐明と云、后御近習小姓、其后勘定奉行物頭格迄相勤。當時主税祐從（御目見以上御留守居支配十人扶持）祖父也。三男八右衛門祐清と云、当時御中小姓彦太郎曾祖父。

(3) 『尊聴録・全』の「聴」の判読について

『奥富士物語』では「尊徳録」、『弘前市史藩政編』（部門別史料・一一頁）では「尊聴録」としている。これは「徳」か「聴」かの「イ」と「耳」の崩し字の判読の仕方にかゝっていると思われる。この書では明確に「聴」と読むことができる。

## 『古往万徳集』(2)

### 凡 例

- 一、原文にはないが、句点（。）読点（、）をつけ、段落を作った。
- 一、漢字はできるだけ当用漢字を用いたが、原文を生かしてそのまゝの漢字もある。
- 一、変体仮名・異字は、一部を除いて仮名または漢字に改めた。
- 一、原文の文体を損わないように、送り仮名・接尾語を付したが、一般的に読めるところは箇所はそのままにした。
- 一、各項目の文頭にある洋数字は、GK128919『古往万徳集』の項目の順序を示している。
- 一、GK128919『古往万徳集』には、古文書としては珍しく、現代の頁数とも云うべき数字が枚数毎に記されている。これを漢数字で示した。
- 一、文中の□□は虫喰い、もしくは判読不能の文字、（ ）内は解読者の注である。

9

十五（承前）

一、信政公、於劔術他流との仕合を不被仰。是れハ勝負の恥入りも深く、良もすれバ遺意となり、無益の事に異変も起る基<sup>(さ)</sup>にて候へば、全く不被仰付。同じ門弟の仕合は必らず被成高覧候由。

諸、当田流<sup>(さ)</sup>に同門の仕合無之と申す事ハ、稽古に表を遣ふにも、一生懸命の心<sup>注(1)</sup>に成り切て仕り候へと教え候。是

れ直の仕合也。其の上にての義は真劔にて仕合の外なし。他流となれば、木刀、しな<sup>十六</sup>ひ、何れにてもする定めにて候。ケ様に常々稽古の節、太刀押取り、はや師とも弟子とも見分け無き程に思入れて遣ふを以て、五本にても二本

にても乃至一本遣へても、息をする程ならバ許を出すべしと定め置く事に候。

稽古の時に、真の時の氣に成りて、廻り廻りて其の凝りたる所にて形自在に成る程ならバ、死逢ふ時ハ却て稽古  
 同前也。是れにて日頃の稽古、用に立つ。皆是れ誠を教る也。畳の上にては畳の上、真劔の場にてハ真劔の上と心  
 氣隔別すれバ、日頃の稽古ハあだ事也と教を立つる、真の事にて有難く辱き也。(かたじけなく) 況んや外扱いと申すハ奥稽古には

切り組も定りを遣う様には候へども、師匠との仕合にて、他流の稽古仕合よりも格別烈しき勝負にて候間此の道理  
 有之故に、此方に仕合ハ無之。故に当田流に仕合御座無き候と、我が心を済まして人の心に不済を差斗(さしかか)る事までも  
 なく、一容に貴人江ものを申上げる筈にてはなし。

右の通りの立派にて御座候間、同流門弟の仕合とてハ常に不仕義に御座候へども、御好みに御座候間、同流の  
 面々、他流の仕合と思ひ申すの格に打合ひを仕らせ、高覧に入れ奉るべしと申上げ候ハバ、流義の本意も相達し、  
 其の身の首尾にも罷成り、益々御流義にも被遊繁昌。双つなき名流義に有之べく候へども、最前の通り、片屈なる  
 言上故に其の理不立、御意に反し、諸人の耳にも不通、独り其の身、時を失ひし事、前々の悪業の障の疊、今更夫  
 れとなく上下の間を塞ぎ、子孫も絶え、其の人不起ハ流義も不盛十七、道を説くも藝術を廣むるも、道法の善悪よりハ  
 唯一人の縁業の吉凶を引く所に有るなれば、身不立してハ道不立、己れ達せんと欲すれバ先づ人を立たせと有るに  
 おいておや。

其の場其の時に至りて顧恐するは拙き也。未見未来、至らざる人は猶の事、我すら不知処を慎む。是れ誠に人の  
 天命なるべし。中庸に、其の不見所を禁じ慎み、不聞処をおぢ恐るゝと有るは、唯我が方寸の内独り有る所、儒書  
 は聞けれども斯く通ずるハ神学の力、神理を寄せて聖語を思へバ意味深長に伺わる。世儒の説も、浅々しき事多く  
 見ゆ。是れ全く自力に非ず、神鏡の明なる光を少し学べバ也。平生ハ、同門死合なしと立てたる流義なれば、右の

通り、時に当てハ仕合はだにも是れを名付け、同門の打合ひを高覧に入れ、段々御信用の上に如何程も道理委細申上げ、有<sup>コトハリ</sup>二劔無一劔の誠の至極を顕さば、流義の本意も相立つ。上の為万世の宝なるべきを、右の仕合、甚だ以て遺念の至義、正に時に随ふと申すハ、昔も今も末の世とても違ふまじき道理、誰とても我が行ふ理のまゝなりとて時を不慎は、小賢固陋<sup>(こせいかしきこうろう)</sup>の場にして、衆人に後指差さるべき片見、いと口惜し。

先師なれども、無類の流義に対しては不足の器也。理の不因裁断を絶たず、誠志無きハ其の詞を尽す事を不得とや。然れども、流義の名誉ハ、明君故御知技被遊<sup>(しりぬき)</sup>永く御国に止る如く被遊しと也。上方にて数年有りし内、餘多の弟子有りといへども傳を不継に、於御国浅利恂<sup>(しん)</sup>禄兵法に心然を尽し、皆済<sup>注(2)</sup>せり。

注(1) 本条でいう当田流とは、『文化紀要』第二十一号で紹介した「当田半兵衛吉正」<sup>写(4)</sup>師範の指導する津輕弘前藩の当田流である。『古往万徳集』の著者桜庭兵助正慶は、当田流の奥儀の深さに敬意を拂いながらも、藩主の御前での同流仕合を拒否する姿勢に鋭く批判している。この条は、前条に続いて「当田半兵衛吉正」に対する論評である。この論評の是非については、稿を改めて論議する必要がある。

(2) 『要記秘鑑』(筆写本、用人・三橋左十郎編、文化年間、弘前図書館蔵)の「師役の部」によれば「延宝三年(一六七五)七月二十五日、当田流劔術当田甚五兵衛が皆傳仕、其節申立之上指南仕罷有候」とある。浅利伊兵衛は明暦二年(一六五六)生れ(東奥日報社『青森県人名事典』一一頁)と云われているので一九歳の時である。『浅利伊兵衛遺書』(次の条の「注」参照のこと)に「当田流劔術の嫡傳元祖当田清源より六代」とある。

一、浅利恂<sup>十八</sup>禄一向兵法に心然を尽し、世事の事物に物忘れ多く、元禄二年の秋の頃々<sup>注(1)</sup>風方の氣味有りて、一入忘れ多かりしと也。其の頃の御番を忘れ致し、不参伺ひ相済まざる内、同年九月廿日<sup>注(2)</sup>御奉公遠慮仕る。

翌年五月中旬御在国の砌、御目付・都谷森甚之丞を以て昼九ツ時、門を響かし案内の御用有之に付て恂<sup>注(2)</sup>禄に対談には、御自分儀御番に罷り出でざる儀ハ、御番繰り替へたるにて有るべし。失念にハ有るまじ。嚙々<sup>(さや)</sup>左様に有之



写(4)弘前市田町最勝院跡の当田半兵衛吉正の墓(左側)。碑銘中央に6個の梵字の下に「冷山秀政居士不生位」右に「日惟元(禄)七甲戌年」左に「十一月十五日孝子敬白」。右側の副碑は、大正十五年七月建立の「一刀流之祖当田半兵衛尉吉正之墓」。経緯については、中村良之進「富田流正統当田半兵衛吉正の墓石」『陸奥史談』第4輯所収に詳しい。

昭和60年6月5日、中野久一氏のご案内で撮影。

べし。此の段尋ね承り候様にとの御意にて候由。  
左様に御座候と申し候へば、首尾能く罷り成るべき瑞相なるべきを、是れも師匠の譲り、簾潔の人。失念に相違無之を、御主人に對し奉り偽り欺き、我が為首尾如何にしても上を掠め奉る様にてあれば、無勿躰と存じ詰め、失念に相違無之段申上げ候へば、甚之丞罷り帰る。

其の日、亦々同役・棟方角左衛門同道にて来り、先の如く案内の上対面し、御自分御番不参の儀、繰り替えにて有之べしと最前の如く申し陳べる。  
左様に候と答へかすと舌一ツ不被返斗に、兩人共に詞を揃え申し達るへ、誠に御憐愍の尊慮を御捨免可遊御結構と見得ながら、何共自分の身晴とて偽を上江申上ぐべき段、無勿躰と斗存じ、初め(ばかり)申上ぐ候有躰を、全く不変が真実とのミ心得、とかく失念にまがひ無之段申切り候由。

則ち両御目付詮無く立戻り、夫れの間もなく十月十五日<sup>注(2)</sup>、浪人被仰渡候。趣は、其の方儀去年九月廿日、御番不参の儀無調法に付、遅参不参へ御免難被遊御定法に候間、永<sup>十九</sup>の御暇被遣候。徘徊の事御城下何れ方共に御構無之、住居勝手次第と有りて知行被召放。

夫れが鞘師町八助と申す者の家屋敷を求め、毎度に相替らず弟子も取立て候處、武者執行を存立つ。一兩年も廻国支度するといへども、其の頃、諸牢人の御国を罷り出候儀無用と有る御法度出で候故、有<sup>(ありて)</sup>躰に申出てハ不成、鞘師町の八助伊勢参宮上下三人と申断り、元禄四辛未三月十六日、弘前<sup>(はの)</sup>忍て出で立つ。

御関所にては当田源左衛門恂禄と名乗り、弟子の内浪人竹森勝太夫、年若なれども氣丈夫に志深き者なれハ、師の供を願ひ、若党に拵え、今一人、同町勘兵衛、是も大男、上下三人也。

弥<sup>(いよ)</sup>天下に引当り、疑ひ無き後、斯くまでも御用に相立つべく思込みにて道場を張り劔術指南を立つるあれば、推して膚を合わせずと云ふ事なく、於勝負ハ不勝と云ふ事なし。

或る時ハ、二刀発斎とて中太刀・小太刀左右に持ち、上下左右稻妻の如く振立て、分厘の透間も無きことく、其の働き、修練の功を重ねし程に、常躰にてハ真似も不可成、詞にも述べ難し。唯今迄多くの修行の者来たるといへとも、こゝを出立不申候と荒言ののしり勢ひ懸る。

恂禄は、廻國中如何なる者との仕合にも、木刀ハ弟子ハ持たせたりとも、竟に小太刀をも出さず、持ちたる扇子にて是れを小太刀の替りに用ひ、此の二刀遣ひとも右の通り扇を以て丁と留めらる。如雷光振ひ乱したるも、被押而ハ又出す事不叶。彼は太刀をからりと捨て、感<sup>(二十)</sup>涙平伏して、貴方ハ正敷<sup>(まさしく)</sup>摩利支尊天なるべし。唯今まで数人と仕合、如此ハ無之。奇妙なる成され方とて唯一本ニ而我<sup>(が)</sup>折られたる事の由。

其の後、常陸の国水戸宰相様より、鹿嶋一郷の師葛西藤左衛門、日本無双の名人なる由聞傳へ、既に尋ね至り謁せん旨。

彼の神流を重くして修行者如何程行くといへども、弟子の内を出して試し、夫れにて済まざること故なし。今度も其の格に取拵ひ、兎角と致し懸<sup>(かけはず)</sup>外して中々對面に可及挨拶なし。恂禄も弟子に逢ひて済むべきと思ひも寄らず。於爰修行中の心尽し、互の意味有躰<sup>(ありてい)</sup>にハ申せども、とかく不出會候。



夫れより社江詣で祈り下向の刻、誠深切の至り、神感にや。(ふと)与風心に浮くの謀ありて勝太夫に私言しへ、是れ迄段々言込めし上逢ひ兼ねるへ、大方知れたる事ぞやと、乍影察する躰を先に響く如く言渡りしかば、本々鹿嶋一郷の指南の藤左衛門門弟ならざるはなく、社職の者に打交り、弟子共大勢有る事なれへ、矢よりもはやく、告のくし(柵植)はを引くもいと早く、心願叶ひ、則日藤左衛門江直談の訳になる。

藤左衛門宅へ呼入れ、座敷江通し對面、一礼終て表は平生の躰なれども、内心ハ甚だ怒りを含みたる事なれば、一事一言の違ひとも恥辱に及ぶべき大切の場、勝太夫は此の座を全く生きて可帰とハ存ぜず、死すとも恥ハ不残と思ひ込み切りて居りたる由。後に語り笑ひしと也。

胸襟ハ本が少しも心怯ぢず、言語容方(かたち)一入打和らげ、息を静かに、段々懇志を述ぶ。礼法序而有之後、藤左衛門言、先ず以て劔術御志感じ入り候。当田流執行被成候な、成る程当田流能き流義に候。弥左様かと問答、先達而宿(いよ)の主人を以ていさゝ(委細)申入れ候通り、逸々語り、猶当田流傳來唯受一人の秘傳ハ継ぎ候上、修行の為諸国を廻り、貴家の事承るに及ぶ。日本無双と有之を以て、此方流義も天下に一人、是れ亦無双。然れバ神流の実を決定致すべきため遙々尋ね来たり、御對談を願ひ快然本望の至りに候。強ニ参調を請受候事、推参に思召さるべく候へども、劔術に志す所の深切を思召され、御詮義を決め頼み入り存ずるとの趣、懇意に述べ尽す。

藤左衛門も尤もと受け、惣じて末代太刀の流義繁多に起り、様々品々の教式ハ種々の品を添ひ、勝負の論沙汰有るといへとも、皆劔術といへば同じ物かと存するハ違ひ、似て非なる共修行とて爰許に來たる者日々の様にハ候へとも、一人として劔術の本意に叶ふ者と覺しきを不見、皆枝葉を取て根本の如く心得、実を失ひたる凡人作るの工夫、勿躰無き哉。太古神流の本源に對し、歎かはしき事ながら仮初にも推参、罪無しとせず、名聞利欲の働き神に惡む處、齒砕けても捨てんと云はん斗。(ばかり)何くれ劔術の道理を申し乍ら、七十有余の老身、歩行も初めハ不自由に見

へしが、其の勢ひニ乗じ、声も荒け、座を扇にて打つ事割る如し。居（丈）高になりてすり寄り、いつ来るともなく恠禄が膝元江必死と練り寄る。試さん為にや、亦真実の怒りにや。譬へば噛み攪む様子にて氣色を替て見えけるとかや。

恠禄、尋常の人ならハ其の先に氣を含められ返答も出問敷に、又、血氣の勇に過ぎなバ事を破るか、兎角危き往還なるに、互ひに名人同士のこと故に、柳と鞠と云ふごとく、聊かも怪我ハなかりしとぞ。

恠禄、修行の膚ひ格別なれば、誠の眼を開てミるに、彼が怒れる如くして我れを侮る如くはげしき軀を、偏に敵するに非ず、唯に劔術に思入れの深き誠の氣の強ミ、自然に忿怒の勢ひ発し、暴風の樹を倒し雷鳴の天地を轟かす如くなれども、周章動くに足らずと胴骨腰居たる心大山の如くなれば、少しも動かず。結局、其の思入れを悦び思ふハ、自ら人の心根とバ天地懸隔て、表柔和にして底に強みを持ち、柔ハ能く剛を制するの位を取て、しづめしづめて表陰に静かに奉るといへども、内陽にして裏に自在を含ミ、心明らかに、業本が利きたり。

藤左衛門ハ、表陽にして勢ひ発して火の如く燃え破る形なれども、裏ハ玄々として探り難し。

治徳を含ミ名人の誠の仕合、ケ様ハ聞ても後学の手本たるべし。

藤左衛門言、笥ハ刀むねもさだかならず、手の内も悪敷、木刀もなまぬるし。真劔ならバ我れとの仕合、此の真劔にてあらハ如何と、柄に手を懸る如く指をさし、一度ならず二度迄既に抜き懸けるかと思ゆる如く致せしも、伊兵衛ハ勇怯を探るなるべし。夫れ程間の無き所にても、上手名人には弥静になる所有れハにや。明かなる心、おのづから実に、抜き抜間敷も、慥に見ゆる事といへバ抜ききに、抜ハ臆病也。敵に臆するは言にや。足らざる其の修行は常の処に有之処、心斗にても不成、業斗にても不成、爰ハ太刀のミ執行よりも居合と申すものが徳にて、一入治め能き事とぞ。実に実に歌の通りにて

己か勇の己か羽風に引立てて

心とさわぐ村蓑かな

此の心を能く不辨してハ居合の徳ハ用に立たず。此の咄の度にハ必らず居合の教え有る事をも称談せりと。

右の仕懸により、もし誤りて脇差を少しなりとも抜身を見する程ならば、夫れハ先に出口を以て九十九髪二つにせんハいと安ければ、周章ぬかずハ勝ちよと恟語られしと。聞くも氣味能き心地する。古語にも、小勇ハ必敵す、大勇ハ不敵とや。藤左衛門のミカ、數十人詰懸けたる弟子各々其の勢ひに乗じ、若し臆したらハ捲り出し敵對に及ばず、師の手に懸る迄もなく落花微塵に取ひしぎ討ち捨てべし。猛氣盈満たりといへども、少しも其の昧にうハムれ動く氣色無く、詞を知らけ、形義を正敷、打ち静かにて御示教有趣ハ、逸々兵法的然たり。

御老人に苦勞を掛け、御手心杯試さんとの不本懐、初めハ宿の主を以て申入れ候如く、互ひに無双の神州たれば、其の的傳を開き、其の極みに二ツ有るまじきを詮義致し度きの本意。然れば、御弟子中と對談にてハ埒の明かざる儀故に、達而對面を申入れ候。神流ハ二ツ有るべからずといへども、其の時の人により、教の筋形に替りも有るべき事にて、偕、極意は二ツ有るべからず。弥大明神の御流儀とあれハ、後世の為に我が唯一の神流と一を明かし開かん為の大願にて候。推参の業ハ其の志趣に宥恕有りて真実の處を承り度く候由。

又、詞を尽し候時、藤左衛門の猛り猶止まずして、言分初めと替り、いやさ当田流よふハ其の流の極意を致して見せ申さんとして、木太刀押取り立上り、ケ様也、是れ劍術極意に不中、用に立たざる事といふ。伊兵衛其の言下に立向ひ、いやとよ夫れは我が流義の極意に非ず、夫れハ山崎戸田、兼牧富田と申して戸田ハ戸田なれと文字の言ひ様も違ひ、我が当田の末流、其の被成候ハ山崎戸田の末、一刀斎に立派の極意、世間にも何れの戸田も同じ物か

と存すると見得候か、左様思召すも尤も也。三流に別ちたるも段々其の故有る事、御望みならハ申語るべしと云ふ。我が当田流の本意夫れにてハなし。仰せらる通りの戸田なれば宜しからず思召すこそ尤もなれ、此方の流義の本意を御目に懸るべしと云ふ。

時に太刀大小中の木刀、(しなひ) 笹までも夫れに出てあれば、何にても御手に合ひ候を以て成されよと有し時、流義の木太刀等此方にても持参致し候へども、夫れ迄も及ばずとて、例の通り持ちたる扇取直し、貴所は真劔にてもあれ木刀にてもあれ、我等を討破かれても御恨みなし。我等是れにて参り候と、明鏡の膚ひ、日頃同門に申聞かするはまりの所を願し向ひバ、藤左衛門忽ち會得有りて其の躰たらくを見るに、彼の流義の極意と同じこと故、持ちたる太刀を投打ち、甚だ感じ我折る。(が) 諸々御自分ハ骨を折られ候よ、夫れ程の御事に候ものを、我が鹿嶋明神の御流儀も夫れをこそ肝要とすれ、それじゃそれじゃと悦び感膽して、此の上ハ何を隔て申すべからず、極意相傳互ひに詮義に懸け申すべしとて、我れを継ぐ一の弟子松岡兵介嫡子ばかり。其の外は皆々爰を引取り候へ、急用ハ格別、何事も案内無用と申すニ付、間の襖(あし)ひしとぞし差向ひ、兩人、許より印可極秘の傳受唯授一人の相傳まで、互ひに残さず、神に誓ひ、あなた々ケ様の事はいかんと有れば、こなたにハ是れハケ様と互ひに言下に明弁して、割符を合する如く、一事一点の相違無く符節を合せたり。共に感涙をしたてゝ悦びあふ事限りなしと。日も薄暮の明の卯刻に至て事終ぬると也。半ばに恟碌辞讓して、兼ねて御内室大病難見放しとの仰せらる訳にと候得とも、理不尽に御對面申し刻を過ぐるに及ぶ。残る品ハ明日にも御意を得べし。御老身御いたつかわし、旁々夜更け候間御入り候へと達て申候時、老人も流石なれハ、いやとよ此の段に餘の神明も照覧あれ、妻子をも思ひよるべからずとて、互ひに本望残す所無く詮義を尽し、右の通り二人互ひの問答、襖の影なる弟子達、舌を震ひ驚き、頻りに渴仰の思ひを起し、勝太夫ハ安堵の肩開き、伊兵衛とも帰りの節の初めに替り、送りの礼節に至るまで親厚の躰(こゝろ)甚だしきとや。

藤左衛門も伊兵衛に逢ふ事神明の御引合はせ、名残り深く申され候得とも、心に任せ難き旅行の末、夫れが居合の名人間宮三之助<sup>注③</sup>同流なれば尋ね行き、是れも對談して旁々首尾能く無事心に志を達し玉ひ、御国江罷歸る。其の神感にや、伊兵衛召出さる。<sup>注②</sup>今に其の子孫繁昌、他国無之御道也。

注① 浅利伊兵衛均禄に関しては『津輕藩旧記傳類』（青森県文化財保護協会編・国書刊行会発行・複製版・四一頁―四一七頁・昭五七）が「浅利万之助由緒書」「貞享軌範録並工藤家記」「浅利伊兵衛遺書」「古老遺譚」「一本萩」「喫茶雜話」から抜粋してまとめている。この内容は『青森県史②』（青森県編・歴史図書社・複製版・二四四頁―二四七頁・昭四六）の「浅利万之助由緒書」「古老遺譚」「浅利伊兵衛遺書」「一本萩」から抜粋してまとめた浅利伊兵衛の記述よりもやや詳しい。

② 本文の諸期日は、右の注①の『津輕藩旧記傳類』『青森県史②』の期日と必らずしも一致しない。左にその例を示す。上段が本文、下段が右の両書から抜き出した期日である。

① 元禄二年秋の頃、風方の氣味で御番忘れる。

② 元禄二年九月二十日より御奉公遠慮。

③ 元禄三年五月下旬、御目付都谷森甚之丞、棟方角左衛門訪問。

④ 元禄三年十月十五日浪入。

⑤ 元禄四年三月十六日出立。

- (a) 元禄元年身代被召上。
- (b) 元禄元年十月十五日御定法により永の暇。
- (c) 元禄四年四月十六日出立。
- (d) 元禄四年閏八月晦日下着。
- (e) 正徳元年八月被召出。

右の期日に関して『弘前藩庁日記（御国日記）』（弘前図書館蔵・筆記原本）に記録のあるのは「元禄元年十月十五日」のみであり、①、②、③の元禄二年の御番忘れの件、御奉公遠慮の件、④の都谷森之丞棟方角左衛門訪問の件、⑤の④の成立の件、⑥の下着の件、⑦再度召出しの件等の記録はない。

次に元禄元年十月十五日（『御国日記』では貞享五年十月十五日となっている。）の記録を紹介する。

一、浅利伊兵衛儀 先達而湯治願之儀ニ付無調法有之候 依之知行被召上候 此段伊兵衛ニ可申渡趣從江戸被仰下候ニ付  
右伊兵衛會所江召寄 如例四奉行列座ニ而大目付佐藤源太左衛門申渡之

右申渡相済 伊兵衛家屋敷被召上候間 改請取可申旨屋敷奉行今治右衛門江申渡之

ついでに、右と関連のある次の記録も紹介しておく。

○同年十月廿巳未日

一、代官成田庄八儀 浅利伊兵衛從弟ニ付遠慮之儀申立候得共 追而致差図候迄相勤せ可申趣小山笹右衛門江申渡之

右の記録から、無調法の儀は「元禄元年十月十五日」以前の出来事であって、期日の点では④⑤何れも著者の記憶違いによる誤りと思われる。また、無調法の内容も「御番忘れ」であったかどうか疑問がないわけではない。『御国日記』の「先達而湯治願之儀ニ付無調法有之」の記録からは、「御番忘れ」は想像し難い出来事である。

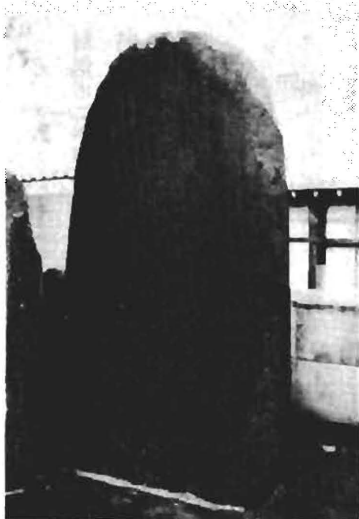
④の元禄三年五月中旬は、確かに藩主信政は江戸より弘前に下向はしていたが、都谷森甚之丞、棟方角左衛門が浅利伊兵衛を訪問した事実はない筈である。なぜなら『御国日記』によればその以前、元禄元年十月十五日に既に伊兵衛は知行召し上げの処分を受けていたからである。

⑤の元禄三年十月十五日は、既述のように元禄元年十月十五日の誤りである。

⑥の弘前出立の期日について、本書では元禄四年三月十六日としているが、『浅利伊兵衛遺書』では元禄三年四月十六日となっている。

(d)本書では出立の期日については書いているが、廻国の後弘前下着の期日は記していない。「元禄四年閏八月晦日」というのは、『浅利伊兵衛遺書』によっている。これが真実とすれば、約五ヶ月にわたる廻国武者修行で、当時としてはかなりの期間ではなかったかと思われる。

(e)の復帰の期日「正徳元年（一七一）八月」は本書になく『浅利万之助由緒書』によるが、元禄元年（一六八八）十月十五日の知行召し上げから二三年後になる。伊兵衛は、この七年後の享保三年（一七一八）、六二歳で死亡してい



写(5)浅利伊兵衛均禄の墓(弘前市龍負山京徳寺)享保三戊戌(1718)十月廿五日無庵園(幽)生居士

写(5)る。

(3) 間宮三之助。田宮三之助の誤り。田宮三之助朝成のこと  
で、号は常快(元禄一五年四月二九日死亡)田宮流居会の四  
代目(紀州田宮流)に当る。田宮流初代田宮平兵衛重正は、  
神夢想林崎流林崎甚助重信の弟子である。(『武芸流派大事  
典』神夢想林崎流及び田宮流の項参照)『浅利伊兵衛遺書』に  
「林崎新夢想流居合元祖、林崎甚助より七代」と自ら称して  
いるが、田宮流居合(抜刀術とも)も、林崎甚助重信の居合  
より発しているために同流と考えたのであろう。この『遺  
書』によれば、田宮三之助に会うために、遠く紀州和歌山ま  
で足を延ばしたとある。

一、信政公、居合は関口流御究め被遊候由。或る時、御側廻りの面々と於御武藝に、御意に、何事も習覚えたるがよ  
し、捨るは安し。取わけ武藝へ、用に立たぬ事の程も少しは知りたる方よしと有りて、御居合刀御差し被遊、扇子  
一本板の上に御立て被遊。其の頭を居合刀の柄(つか)にて御押へ被遊、少し御退き成られ候而、其の扇のころばぬ間に出  
口にて御打ち成られ候事数度、何十度に及ても一度も逃るゝ事なく打たせられ候故、皆人感じ奉り候時、御意、如  
此居合は、業の助けに少しは可成ものなれども、強いて好むべからず。古来の武士達、漸く武のせんさく強しと心  
得べきは、是れ居合を武藝に非ずと定め候事ぞ。其の子細へ、見る通り抜き身の勝負にて出口を肝要とす。左あれ  
ば、鞘に有る内に勝負を取るを本とし、既に敵刀を抜きたるにも此方へ思ふ図にてこそ抜き拂はんと思ひ、抜き持  
ちたる敵に向て抜くべき場に抜かぬ所が、はや負ぞ。其の方万一仕損じ討たれ、抜くも合わせずして打たれたと云  
う批判になりてハ、負の上に大なる恥也。勝負ハ少しの前後の仕方にて、打たれても打ちても善悪の批判有り。敵  
は抜き懸るに出口にて致すべきと思ひ、抜くべき敵に向ひ抜かざる所武士道に叶はずとして、居合ハ武藝に非ずと  
云えり。されども、極々至秘に至てハ、劔術なれば捨るに非ず。併し、深意に至らず、極秘を尋ねずしてハ右の沙

汰ありと御示し被遊候由。

又、今の世迄も下郎共取る相撲ハ、古来ハ武藝也と論ぜり。是ハ互ひに勇猛を勵し、威力を争ひ、氣の勝負を劣らじと勵む。若し誤て指の先にても地につけバ、はや負と定めたるハ、是れ恥を知りたる処にて義を立る故に、全ふ昔ハ武道に叶ひたるもの也とて武藝の内江入れたり。去る程に、古ハ諸士大名も相撲ハ取りたり。<sup>廿七</sup>河野又野其の外名人の事、何れも聞及ぶべし。

又、やわらと云ふものハ、其の業是れに反して能々入れ立たずしてハ却て武藝に非ずと云ふ。則ち、相撲と其の<sup>(意氣地)</sup>いきち表裏の心はへ有り。子細ハ、我れ先に寝て後で敵を取る仕方の負け有り。其の上身のしなへを用ふるなれば、<sup>(意氣地)</sup>甲冑を帶してハ成らざる業も有るべし。勿論大小も邪魔になる様也。彼れ是れ以て不図<sup>(ふと)</sup>悪敷心得ると武道のいきち<sup>(意氣地)</sup>に逃れ、武藝に非ずと古来武道の吟味強き時分に定むると也。然れとも、身の利、手足の用を知る故、習覚ひて悪敷に非ず。且つ柔而己<sup>(のみ)</sup>勝れて上手になる時ハ、此の上なき物の様に思ひ、必ず身の大事に繰りてハ得たる事ハ自然に出るものぞ。能々可心得之。

亦、手取といふものハ違ひたる所有り。似て不同。第一甲冑をして組打をする所に用ふると也。なほ治国にても捕籠者に不限、時に繰りて其の用多し。是等格別なる事武用也。尤も、不可捨杯とケ様に委敷<sup>(くわし)</sup>武業の利用まで其の時其の場の御教導専らに被遊御座候由。

注(1) 鎌倉時代の武者河津三郎祐泰・俣野五郎景久のこと。

廿七(承前)

一、一年、江戸表にて酒井雅楽頭様御舎第酒井肥後守様、折々独陰と申す太刀の師有る義御進め被成候由。折節御招<sup>注(1)</sup>きの刻、さのミ御沙汰なきも肥後守様思召も被成御座候にやと、流義に御入り可被遊と有りて、既に<sup>(しるじ)</sup>作太刀其の流



義の道具迄仰付けられ、残らず出来の上一日彼の独陰を召寄せらる。其の日の御客様方牧野備後守様

其頃市左衛門と申由

西尾小左衛門様杯も御出の由。何れにも御同席にて御意被遊候へ、肥後守殿御進めにより、今日も独陰門弟に入り

執行可致と存じ呼向候得とも、祇今迄の師へ対し一礼に候間、独陰と仕合を御試被遊、其の上にて兎に角も御究め

可被遊と有りて被成御立、小太刀の笹御取り被遊御待向被遊候。独陰異義無く中太刀の笹を押取り、無左右不進、

少し猶餘して有しか、青眼に構ひ静かに伺ひ寄る。近くなるまゝ御前にも相位に御附合ひ被遊候時、独陰実とさけ

すミ御様子を伺う躰也しか、持し太刀を取落すことくからりと下に置き、両手を突き畏り、(まじり) 諸々至極仕り候。ケ程

に御執行御熟得被遊候上を、私式の申上ぐべき様も無御座候と謹んで申上候へば、御前にも御笹を治めさせられ、

御本座に御着被遊、御挨拶も相済む。

其の後独陰申上候へ、私弟子召連れ罷上り候。恐多奉存候へとも、私門弟の中にハ能く仕候者に御座候間、一本御仕合被成下候様にと奉願候由。

其の身さへ御相手にも不及、平伏仕候上にて弟子の義申上候。とても御膝にも掛けさせられず、其の分に御取上ケ不被遊候ても相知候事に候へば、能く仕候と申を以て、其の詞に御心被為附候か、いと安き事也と有りて、望に任すべし、御前に出候へと、御近習の面々被仰付罷出る。

其の躰(てい)廿有余の健者、(したたかも) ばりばりする麻上下を着し、少しも臆せず畏り罷立つ候時、一往の御辞退も不申立、大太

刀の笹押取り向ひ奉る。此の度も御前にハ、例の笹御逆手にぶらりと御下ケ御持ち遣ひ御立向ひ成られ候所江、彼は青眼に付ケ、するすると寄り候。尤も独陰流の青眼、手出して前江寄り、劔中体の間に透有り、其の所を打込ませられ候へば、両腕を掛け太刀ハ打落され奉り退きぬ。

御一座の人々あつと感じ奉り、(まじり) 備後守様御初め何れも諸々見事なる御勝ちに被成御座候と奥に入る。流石の独陰

も、擬々唯今の虚の所を能くも能くも御打ち被遊候御事と称美し奉る。皆々同敷詞を揃ひて申上候に付、少し御見向き被遊、御會釈被遊候時、彼ハ無面目や有けん、其の隙を幸とや、又ハ血氣に被犯けん。大太刀押取直りし奉、懸打。躰ひらりと見ゆるに押移られ乍ら被為飛違、けさ懸の心に御手の内ハよし、したゝかに御打伏せ、理不尽なる仕方哉と御にケ笑ひ被遊。猶々御勝ち見事に遊ばれし故、御座中御次の間迄も弥感悦甚かりし由。

彼の者ハ、二の太刀も不出程に慥に御打ちすへ被遊候へとも、身の内に少しも疵ハ不被為附。是れ一入御奇妙被遊方、日頃御修練の至極、当意則妙、不可申上尽歎。

ケ様の義書き頭はすの義、結局御大将の卑夫なる被遊方と後人の思量も有之。御天徳を奉穢候様にて恐れ不  
少候へとも、剣道唯一の妙用の場に至て、毛頭危き事ニ而無之由。一戸宗明咄し被申候。

注(1) 「一年、江戸表にて……」から「……御本座に御着被遊、御挨拶も相済む。」は、「渡辺利容筆記」から引用として『津輕歴代記類・上』（青森県文化財保護協会編・国書刊行会発行・復刻版・一七二頁・昭五七）に収録されている。ただし、こゝで津輕信政と仕合をした相手は、本書の「独陰」という人物ではなく「独愼」となっている。どちらにしてもこの人物と本名は不詳。

## 追記

「当田半兵衛吉正」の墓碑について。

『古往万徳集』によれば、当田半兵衛は「元禄七甲戌年十一月十五日七十余歳にて病死す。最勝院廟  
新有之由」と記されている。「最勝院廟所有之由」という表現は、著者桜庭兵助が自分の眼でこの墓を確かめたのではなく、傳聞によったことを意味しているのではなからうか。おそらく当時であっても当田半兵衛の墓については、最勝院や当田流等の一

部の関係者以外にはあまり知られていなかったのではないかと推察される。それが明治五年（一八七二）神佛分離（最勝院は弘前八幡宮の別当の一つとして弘前市田町にあった）によって現在の弘前市銅屋町大円寺跡に最勝院が移ることによって、弘前市田町の最勝院跡に残された当田半兵衛の墓を知るものは一層少なくなったと思われる。

しかし、中村良之進「富田流正統當田半兵衛吉正の墓石」（『陸奥史談』第四輯所収）によると、「當田半兵衛先生云々と刻した門人共より建立したかと思はるゝ丈け四尺余の板碑は、明治初年の末頃まで最勝院跡玄関の北方十間余を隔てゝ居る場所に、南に向つて立つて有つた」ことが確認されている。ところが「明治の末年に至つて見当らなくなつた。」そこで故中村氏は同志とともに数年間探したが発見できず、一時は中止せざるを得なかったが、「昭和初年」になつて『陸奥古碑集』の編纂に當つて再び搜索することになったという。そして、いろいろな情報から以前市が土を採取した跡の穴に「掃溜や草」などと一諸に埋められている墓石がそうではないかということで、苦勞の末発掘したのが一五頁の写真の左側の墓である。

しかし発見した時は、その碑銘は中央に六個の梵字が縦にあり、続いて「冷山秀政居士不生位」、右側に「日惟元口七甲戌年」（元禄の禄の字を口としたのは欠けていた部分で、現在ほもつと縦長に欠けて判読も難しい。）左側に「十一月十五日孝子敬白」とあつて、誰の墓か判らなかつたという。そこで銅屋町の最勝院を訪ねて古過去帳を調べたところ、同一筆蹟による次の記帳を発見するに至る。

十五日

冷山秀政居士 元禄七甲戌年十一月 當田口三郎<sup>(七)</sup>

先口<sup>(祖)</sup>浅利伊兵衛兵法の師

十六日

冷山秀政居士 元禄七甲戌年十一月十五日<sub>は</sub>當田七三郎

先祖淺利伊兵衛兵法師

右のような経緯があつて、はじめてこの墓が当田家によつて建てられた当田半兵衛のものであることが確認された。

これが大正一四年の秋であつた。しかし「半兵衛の高弟淺利伊兵衛を初め門弟子等の建立したかと思はるゝ前記の当田半兵衛先生云々の副碑は遂に発見」されなかつた。このような俗名の刻まれた副碑がなければ「折角発見した墓石も後世に至ると、また誰のものやら判明しなくなる」おそれがあるといふので、ある篤志家によつて写真の右にあるような「一刀流元祖當田半兵衛尉吉正之墓」が副碑として建立されたのである。これが裏面に刻まれているように大正一五年七月のことであつた。

この墓と副碑は、当初は発掘された場所に建てられていたそうであるが、中野久一氏（弘前市禰宜町々会長）の説明によると、そこは私有地になつていたのでさらに旧最勝院墓地に移し供養しているとのことである。